

風の中に音あり、砂の上に印あり

大連海事大学 情報科学技術学院 郝顔



かなり躊躇してから、ようやく拙文を書き始めました。あれだけの文字を読んでから、心の思ったこと、感情の向かう先を書き留めるのにはいつも抵抗を覚えます。雨の日や深夜に心静かに本を読むたび、本に触れた感覚の柔らかさと軽快さが今でもこだましています。ああ、風の中でなくしたあの音は、まだそう遠くへは行ってない……

自分の感情が大きな流れに沿っているかは分かりませんが、たぶんやや独り歩きしています。しかし私は最も真心のこもった言葉で東野圭吾の小説を読んだ感銘を表したいので、それほどはっきり書けないかもしれませんが、自身が読んで理解できる限界なのです。

ある日『容疑者 X の献身』を手にとって、論理思考は得意でないものの推理熱が高まっていた私は、東野圭吾の著作を読み始めました。分厚い本ではないものの、ごく筋道だった章節にはひたむきな男性のイメージが描かれていました。簡単で短い対話と太い線でスケッチされた情景で、日本に、そしてスラムのある旧江戸地区に本当に引き込まれました。そこには助け合って生きる母と娘がいて、考えが綿密で感情の欠けた数学教員がいて、鋭い眼光と超人的な頭脳の探偵も欠かせません。私はそうしたものが推理小説の肉体を構成しており、その魂は人物の錯綜した複雑な関係サスペンスに満ちた殺人事件と解決までの紆余曲折の過程なのだと思います。幸い主人公間の関係は複雑ではなく、何のつながりがあるとも言えないものまであります。母と娘が初めて訪問したときぱっと目に入った汚れのない眼差しだけで男性主人公は改めて希望に燃え上がりました。常人からすると、一度の平凡な出会いで火花が散ることなどあり得ません。私はいつの間にかここまで深くはまってしまったのでしょうか。ヒロインは不幸で、前夫のいざこざにつきまといまわっていますが、しかし彼女はきっと幸運です。手元が狂って殺人事件を招いた後、隣人からの援助がありました。しかし隣人が命を惜しまぬほど彼女を愛する守り神だったとは彼女が知るよしもありません。石神は厳密にもう一つの殺人事件を作りだしてこの殺人事件を覆い隠しましたが、それはもう大変なことです。残念ながら完璧な計画も結局は破綻し、彼がガラス戸に向かって髪をいじり、無名氏が消えるシーンを通じて、真相が明らかになります。東野君の小説の魅力には「天網恢恢疎にしてもらさず」の法理も含まれているのかもしれませんが。物語そのものから私は世の中の真実の愛が海のように広大な、ひた隠しに隠されたものだと味わいました。風の中には愛の音信が翻り、砂の上には思い慕った印が刻まれています。

東野作品には男女の感情だけでなく、もっと普遍的な気持ち、人を救うことの善がにじみ出ています。『ナミヤ雑貨店の奇蹟』では、通り抜ける性質のかなり強いブリッジプロットが確かに一大ハイライトです。浪矢老人は道に迷った人々を助け悩みを解いてあげていましたが、さらに一連の非常に不思議な効果で、ぼろぼろな雑貨屋で世に比類のない並み外れた救済劇が繰り広げられました。ある孤児院が一つ一つの物語を束ねてタイムカプセルに詰めました。浪矢老人は茫然としている人のために方向を示して、世界にすばらしいものを残したのです。風の中に音あり、信中に情あり、初心を忘れず、それでこそ完成。

人は善悪を分け、道理は自然です。まさに『悪意』でゴーストライターが自分より有名になった作家を謀殺するなど社会の恥です。どんな苦しい胸の内があるにせよ、ここまで悪辣な行為をしてはなりません。しかしよくよく考えてみると、二者とも元から悪意を持っていて、一人は相手を何かにつけ脅迫し、一人は動機を心に隠していました。二種類の悪意がぶつかり合っ、おのずと取り返しの付かない悲劇に変わり、二人とも戻らぬ人となりました。人は貪欲な動物で、虚栄の存在でもあり、その両方がかみ合えば、道義が滅び、闇が湧き返って、災難が四方に潜みます……

それから東野圭吾作品の無冠の帝王『白夜行』を読んで、深く心を打たれました。私はこの本の核心は悪に帰結すると思います。人を引き付ける名前をした雪穂はあたかも苦心して身につけたかのような気高い風格ですが、そこには彼女の極度の虚栄心が見えます。彼女の背後に一体どれだけの真相が隠されているのかは難解で、私にははっきり言えませんが……世の中にここまで汚い取引があるとは思ってもみませんでした。お金の

ために母親が娘を生き地獄に突き落とすこともいとわれないなんて。雪穂が母親を殺害したことも含めて、人間性の醜さが体现されています。そして桐原は雪穂を守るため、自らの父を殺めてしまいました。こうして家庭の温もりを失った二人は、罪を隠すため、手を尽して身内や友人を殺すように。一幕一幕の計画、一つ一つの殺人事件、一件一件の取引が脳裏に投影されるたび、賛嘆してやみません。一体どれほど彼らの心が残忍で、野心が大きく、策略が複雑なのか、私には分かりません。私に分かるのは、残酷な生活にねじ曲げられた傷だらけな絶望の心だけです。手に手を取って太陽の下を散歩したいだけ、という物語の核心を象徴する絶望の思いが、美しい表看板を掲げているかのように、無数の無秩序な行為に沿って一つ一つ元の姿に戻っていきます。全文を通して二人が向かい合い本心を見せることはなく、永久の誓いの言葉もありません。最後には氷のように冷たい絶望の詭計だけが残って、雪穂の偽装たやさしさと桐原の暗部の憂鬱さが照り映えています。亮司が飛び降り自殺をしたとき雪穂が振り向きもせずエスカレーターに乗ったそのとき、最後のわずかな温情さえ灰燼に帰してしまったのだと分かりました。雪穂の自白も最後に少しだけ分かりました。「私の空に太陽はなく、いつも闇夜だけど暗くはない。太陽の代わりがあるから」……彼らの背景が奪い去った光明と希望は、哀れでもあり憎くもあります。その中で最も絶望した思い、最も悲嘆した見張りが展開されたのです。またこの思い、この地味で実現できない運命の愛にこそ、東野圭吾は日本文学の焦がれ続ける永久の悲しみを留めています。風の中に音あり、それは切ないうめき。日中に夜あり、それは悲しい終結。

東野圭吾の小説には、日本の探偵小説に顕著な特徴である科学的教育性の強さが映し出されています。小説の背景を探るうち、彼の知識面とあまりにもの時事問題をつかむ力の強さを深く感じました。彼は現実に対する思考と適応、再認識、応用の能力が本当にずば抜けていて、我々が学ぶに値します。

本は人生のようなもの、本を味わうのもまた人生を味わうことで、一冊の本が生活に根ざしてしかも俗世間より高みにあるさまざまな人生を演繹してくれます。さまざまな辛酸苦楽が、水を飲むかのように自ずとよく分かり、そこにある美醜や善悪は、心の秤にかければ火を見るよりも明らかです。風の中をかすめて飛ぶ鳥の翼は少しも痕跡を残しませんが、その音で鳥が飛び去ったことを世界が知ります。砂漠が映し出すラクダの影は夜の闇に埋もれても、連なった足跡がラクダが遠くへ行ったことを後の人に示します。人はそれぞれに人生があり、あるいは悲しみあるいは喜びますが、人として生まれた以上、痛快に生きるべきではないでしょうか。痛みでさえ楽しむのです。どのみち最後には誰の終わりも同じなのですから。愛と美を選べば、生きる価値がもう少し大きくなるのではないのでしょうか。少なくとも、年老いて昔の事を回顧するとき、自分が風の中に残した音を耳にすることができて、果てしない泥道の途中に残した印が見えれば、不快ではないでしょう。

容疑者 X の献身、東野圭吾(著)、劉子倩(訳)、南海出版公司、2014 年
白夜行、東野圭吾(著)、劉姿君(訳)、南海出版公司、2013 年